

3 人間文化研究科の令和5年度FD活動

大妻女子大学大学院人間文化研究科FD委員会は、令和4年度～6年度の3年計画で、大学院におけるFD活動の実施計画を策定した。この実施計画にもとづき、個々の具体的なFD活動を実施してきたので、その実情を以下の通り報告し、今後の活動に繋げたい。

I. 令和4年～6年度大妻女子大学大学院FD実施計画

1. 基本方針

大学院FD委員会の協議のもと、院生の入学から修士課程修了ならびに博士後期課程修了までの全学習・研究過程を視野におさめながら、より質の高い教育ならびに研究指導の実践を目指して、大学院における教育力を高める。よって、大妻女子大学全学の教育力向上に貢献する。

① FD活動の目標

大学院FD活動の目標を次のように定める。

- ① 学部・短大FDと大学院FDの連携のもとで、学部の入学・卒業から大学院入学・修了までを展望したFD活動を実施する。
- ② 教育活動に有益なFDを実施することに努め、教員が協力しやすい状況をつくり、全員の参加を目指す。
- ③ 教員対象のFDにとどまらず、職員や院生の協力・連携を基盤とした、全体的なFDに取り組む。
- ④ 個々のプログラム内容の充実に努め、その成果に関する情報を集積し、関係者の間での共有化を進める。

② FD活動の計画

大学院FD活動の計画は次の通りとする。

- ① 「大学院進学意識に関するアンケート」
- ② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」
- ③ 「大学院修了時アンケート」
- ④ 院生・教員懇談会の実施
開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとする。懇談会の結果、院生からもたらされた意見・要望については、その都度、取りまとめて、FD委員会に報告する。
- ⑤ 学会発表の奨励に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑥ 学内発表会の奨励・支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑦ 院生論文集発行の支援に関する活動
「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」を掲載誌とし、編集事務局の援助を受けながら発行していく。
- ⑧ 他大学との各種連携の活性化に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。
- ⑨ 就職支援に関する活動
活動実態については、専攻ごとに取りまとめて、年1回、FD委員会に報告する。また、大学院生の就職支援体制の充実に努める。
- ⑩ 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動
社会人院生に対して制度の充実や環境整備を具体的にどのように推進していくか検討する。
- ⑪ 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動
専攻・専修内の授業間の整合性の検証やスリム化を視野に入れた教育・研究体制のあり方について検討する。
大学院の組織の見直しを随時検討する。

- ⑫ その他の活動
大学院生室の有効活用の検討などを行う

Ⅱ. FD 活動の実施状況

以下、3つのアンケート調査を実施した。①から③は、Google フォームによる WEB アンケートを利用している。

① 「大学院進学意識に関するアンケート」

大学院修士課程入学者を対象に、10月に実施した。その結果については、「Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

② 「大学院の研究・教育に関する意見の収集」

全大学院生を対象に、昨年度とほぼ同じ内容で10月に実施した。その結果については、「Ⅳ. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）」と題して、本報告書に掲載した。

③ 「大学院修了時アンケート」

令和5年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に2月～3月にかけて実施した。その結果については、「Ⅴ. 大学院修了時アンケート（結果の概要）」として、本報告書に掲載した。

Ⅲ. 大学院進学意識に関するアンケート（結果の概要）

Ⅲ-1 はじめに

大妻女子大学大学院人間文化研究科は平成22年4月（2010年）に改組して以来、14年目を迎えた。本年度も「大学院 FD 活動実施計画」に基づき、前年度とほぼ同様の内容で「大学院進学意識に関するアンケート」と「大学院の研究・教育に関する意見の収集」（Ⅳ.参照）を実施した。前者は修士1年生を対象に、後者は大学院生全員を対象に実施した。以下に両調査の結果の概要を提示する。

Ⅲ-2 進学意識に関する調査の目的と方法

「大学院進学意識に関するアンケート」の目的は、大学院進学にあたっての経緯や動機を把握し、いかにして多くの学生が集まる魅力的な大学院をつくるかの参考にすることにある。調査の方法は志望動機、志望決定にあたっての情報入手経路、他大学との併願状況、修了後のキャリア計画、大学院生活への抱負などを聞いた。

Ⅲ-3 調査の対象・時期・回収の状況

「大学院進学意識に関するアンケート」は、次の要領に基づいて実施した。

- (1) 調査の対象：令和5年度人間文化研究科各専攻修士1年生16名を対象とした。回答者は11名だった。
- (2) 調査の期間：令和5年10月13日（金）～10月31日（火）→11月14日（火）まで延長
- (3) 調査の方法：Google フォームによる WEB アンケート。
- (4) 回収の状況：平成29年度から今年度までの1年生の回答者数と回収率を表1に示した。期間中、5度、回答催促を行った。今年度の回収率は68.8%で、一昨年度および昨年度の59.2%と比較すると増加した。

表1 大学院進学意識に関するアンケート（新入学者）

対象者	平成29年度 (H29)	平成30年度 (H30)	令和元年度 (R1)	令和2年度 (R2)	令和3年度 (R3)	令和4年度 (R4)	令和5年度 (R5)
新入学者	24	18	18	18	12	27	16
回答者	19	12	17	15	10	16	11
回答率(%)	79.2	66.7	94.4	83.3	83.3	59.2	68.8

Ⅲ-4 大学院への進学の動機について

「本学大学院への進学を志望するに当たって、その動機に係る1～12項目に対してどの程度重視しましたか」との問いに対する結果を、表2に示した。「非常に重視した」5点、「かなり重視した」4点、「どちらとも言えない」3点、「あまり重視しなかった」2点、「ほとんど重視しなかった」1点、「まったく考えたことがない」0点として平均点を算出した。

表2 大学院進学にあたって重視した動機項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		H29 (n=19)	H30 (n=12)	R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)
1	将来、研究職・臨床職に就きたいこと	3.9	2.9	3.4	2.8	3.2	3.6	3.8
2	専門分野の学位が取れること	4.1	3.9	3.6	3.8	3.8	4.2	4.3
3	就職に有利になること	3.3	2.3	2.5	3.0	2.6	2.8	2.5
4	自宅・会社からの通学が便利なこと	3.2	3.0	2.6	3.3	2.9	2.5	2.5
5	指導を受けたい教員がいること	4.4	3.8	4.0	4.5	3.9	4.0	4.2
6	大学のネームバリューがあること	2.5	2.2	1.8	2.5	2.0	2.6	1.8
7	就職を先に延ばせること	1.7	1.6	1.3	1.3	1.2	1.4	1.4
8	希望する就職先がなかったこと	1.4	1.2	0.6	1.4	1.3	0.7	1.7
9	奨学金を受給できること	2.3	1.6	1.8	1.3	0.6	0.9	1.4
10	専門の資格が取れること	3.8	3.1	2.6	2.0	3.1	3.6	3.2
11	研究したいことがあること	4.3	3.8	4.1	4.2	3.6	4.0	4.2
12	在学中の学費の支払いのこと	3.5	3.4	2.9	3.4	2.8	2.9	2.4

※表中数値は平均値

表2に見られるように、全体的な傾向としては過去6年間とほぼ同様であり、「指導を受けたい教員がいること」「専門分野の学位が取れること」「研究したいことがあること」といった項目が上位を占める。一方、「将来、研究職・臨床職に就きたいこと」「専門の資格が取れること」も比較的上位にある。

Ⅲ-5 大学院進学にあたっての影響を与えた情報源について

表3 大学院進学にあたって影響源となった項目の順位

		平均点数（5～1点評価）						
		H29 (n=19)	H30 (n=12)	R1 (n=17)	R2 (n=15)	R3 (n=10)	R4 (n=16)	R5 (n=11)
1	本学の先輩の研究成果を見たこと	2.8	1.7	2.4	2.0	1.6	2.2	2.3
2	大学院に行っている友人・知人からの情報	2.9	2.0	2.9	2.1	1.8	2.2	2.6
3	両親や兄弟姉妹から勧められたこと	1.8	2.2	1.9	1.3	0.9	1.5	1.5
4	自分の配偶者の意見	0.6	1.1	0.8	0.2	1.3	0.7	0.1
5	大学院紹介の受験雑誌などの記事	2.1	1.2	1.1	0.9	0.8	1.9	0.4
6	本学発行の大学院紹介パンフレット	2.9	2.6	2.6	2.3	1.4	3.4	3.1
7	学内の大学院進学説明会	3.6	2.9	1.8	2.6	2.1	3.3	2.8
8	学外の大学院進学説明会	1.4	0.8	0.8	0.2	1.4	1.8	1.3
9	本学のホームページの記事	2.6	2.0	2.9	2.5	1.3	2.9	2.5

10	指導教員になる教員との相談	3.9	4.2	4.2	4.5	3.6	3.6	3.6
11	学部時代お世話になった教員との相談	3.0	3.4	3.1	2.9	2.4	設問欄なし	設問欄なし
12	出身の大学の先生との相談	3.0	3.6	2.5	2.0	2.5	2.6	3.3
13	出身の高校の先生との相談	0.8	0.2	0.4	0.3	0	0.2	0.2
14	教員の業績と研究テーマをみて、将来自分の研究テーマを追及していくうえで最適な場所と考えたから	3.8	3.6	3.9	3.9	3.1	3.3	3.4
15	他の大学院にはない独創的な文化資源（蔵書、マニュスクリプト、物的資料など）があると考えたから	2.1	1.8	1.9	2.4	1.6	2.4	1.5

※表中数値は平均値

「指導教員になる教員との相談」が高い得点であるのは、例年通りである。「学内の大学院進学説明会」「本学発行の大学院紹介パンフレット」が高い得点となったのは、新しい傾向であると考えられる。

Ⅲ-6 他大学の受験状況：

「他の大学院を受験しましたか」の質問に対しては、11名中9名が「いいえ」と答え、1名が未記入であった。他大学大学院受験生は1名であり、大学名の記載は未記入であった。

Ⅲ-7 大学院修了後の進路及びどのような大学院生活を送りたいか

「大学院修了後の進路は、どのように考えていますか」については、平成29年度からの推移を表4にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表4 大学院修了後の進路について（複数回答）

	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
1 博士後期課程に進学したい	26	42	35	13	0	37	36
2 外国に留学したい	16	17	6	0	10	6	9
3 教育職員（専修）（幼稚園・小・中・高校・栄養教諭）として就職したい	21	25	12	13	0	6	18
4 専門社会調査士として就職したい	0	17	6	0	0	0	0
5 臨床心理士として就職したい	37	33	24	13	40	44	27
6 研究機関で研究開発の事に就きたい	16	8	24	13	20	19	27
7 民間企業で一般職の業務に就きたい	0	17	24	20	0	19	18
8 民間企業で総合職の業務に就きたい	16	17	24	13	30	12	0
9 公務員として就職したい	11	17	12	20	0	25	18
10 大学教員として就職したい	16	8	29	13	0	12	27
11 まだ具体的に考えていない	5	8	18	27	60	19	27

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

表4に関しては、「臨床心理士として就職したい」が、昨年44%から今年は27%に低下した。また、「博士後期課程に進学したい」が昨年37%から今年は36%と横這いとなった。

「どんな大学院生活を送りたいか」の質問に対しては、平成29年度からの推移を表5にまとめた。複数回答であるため、数字は回答率で示した。

表5 どんな大学院生活を送りたいか（複数回答）

	H29	H30	R1	R2	R3	R4	R5
1 専門分野についての研究中心の生活をしたい	63	17	59	53	30	37	54
2 研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい	58	50	53	80	70	62	72
3 たくさん授業科目を履修して社会に出るための教養を深めたい	42	25	18	0	30	25	18
4 就職活動や資格を取るための時間を多くしたい	16	8	18	0	30	25	9
5 就職活動を早めに始めて、まずは就職を決めたい	16	8	12	20	20	12	0
6 狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい	37	25	18	47	30	56	27
7 アルバイトや遊びはできるだけ控えたい	11	17	12	7	10	12	9
8 アルバイトや遊びも大いにやりたい	6	8	12	13	20	19	27
9 自由な時間をできるだけ楽しみたい	16	17	18	33	20	25	36
10 どうするか、まだはつきり考えていない			9	7	0	0	0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

回答率が高い順に、「研究（実験・実習を含む）と自由時間をバランスさせたゆとりある生活をしたい」72%、「専門分野についての研究中心の生活をしたい」54%、「自由な時間をできるだけ楽しみたい」36%、「狭い専門分野の研究にこだわらずに、幅広い分野の知識を得たい」と「アルバイトや遊びも大いにやりたい」が27%という結果が得られた。

Ⅲ-8 大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと

「大学院進学に当たって一番考えたこと、悩んだこと」の質問に対しては、以下の4件の記載があった。

- ・学費や生活費、その他諸々の費用などの支払いと学業、研究生活と両立できるか。アルバイトをする時間はあるのか、修士課程に進んだ後、本当にやりたいことは見つかるのかなど。
- ・周囲に進学する人がいなかった為、少し心細かったと共に就職がしづらくなるかもしれないと先生方からお話をいただき少し悩みました。
- ・自分の性格が緊張しいため、発表などへの心配
- ・学費を自分で払うことができるかを悩んだことがある。

Ⅳ. 大学院の研究・教育に関する意見の収集（結果の概要）

「大学院の研究・教育に関する意見の収集」は、全大学院生を対象に授業内容、履修環境、事務体制に対して点数による客観的評価と自由記述による意見を集約し、授業方法の改善、カリキュラムの構成、設備の整備など、教育改革に反映させることを目的としている。

平成25年度から回答を、「非常にそう思う；5点」から「まったくそう思わない；1点」までの5段階評価としている。評価点は、回答者全員の平均点と最高点、最低点を算出している。

（ア）調査の対象：大学院人間文化研究科に在籍する大学院生60名

（イ）回収の状況：45件の回答があった（回答率75%）。

結果の概要は以下の通りである。

Ⅳ-1 各評価項目

大学院の授業全般についての評価は表6の通りである。問1から問4までの各項目は5段階評価で概ね4点前後にあり、コロナ禍による制約が減じたことが、この高い数値をもたらしたもの

と思われる。

しかしながら、問5の学外研究・学外実習に関する項目は修士課程が3.8、博士後期課程が4.2と低く、全平均も3.8にとどまった。昨年度よりも若干回復したものの、新型コロナウイルス感染症の影響がまだ完全には払拭されていないことがわかる。

表6 大学院の授業全般についての評価

課程	回答数	問1	問2	問3	問4	問5
		シラバスに記載された到達目標に示された知識や能力を獲得できた	授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった	授業の内容は専門知識等を習得する上で十分な意義が感じられた	研究指導や論文指導のあり方について適切であった	学外研究・学外実習について希望通り実施することができた
修士課程	39	3.9	4.1	4.3	4.1	3.8
博士後期課程	6	4.2	4.2	4.3	4	4.2
全平均	45	3.9	4.1	4.3	4.1	3.8
最高点	45	5	5	5	5	5
最低点		1	3	3	1	2

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

続いて、大学院の履修および研究環境については表7の通りである。

事務手続きのシステム全般、およびガイダンスの日程や実施方法、図書館他学校の施設設備については4前後の評価が得られており、コロナ禍に対応した運用ができていたと考えられた。

表7 大学院の履修および研究環境について

課程	回答数	問6	問7	問8	問9
		システム全般の手続き方法について分かりやすかった	ガイダンスの日程や実施方法について適切であった	図書館他学校の施設設備について満足している	院生自習室の利用方法について満足している
修士課程	39	3.7	3.8	3.7	4.3
博士後期課程	6	3.7	4.2	3.7	3.8
全平均	45	3.7	3.8	3.7	4.2
最高点	45	5	5	5	5
最低点		1	2	1	2

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

教育・研究支援について表8に示す。

表8 教育・研究支援について

課程	回答数	問10	問11	問12	問14
		院生自習室の設備について満足している	事務職員の対応は適切であった	大学院の学費・奨学金は適切であった	授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた。
修士課程	39	3.9	4.2	3.8	4
博士後期課程	6	4.2	4.5	3.4	5
全平均	45	3.9	4.2	3.7	4.1
最高点	45	5	5	5	5
最低点		2	1	1	2

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

評価結果から、全体的には適切であったといえよう。しかしながら、**IV-2**にとりあげた自由記述欄の記載から、多摩キャンパスにおけるプリンタ関連の不満の声が顕著である。

IV-2 大学院の授業全般（問 1～5）、履修・研究環境（問 6～9）、教育・研究支援（問 10～12）に関する自由記述欄への記述状況

自由記述欄に記載された意見については、そのままの意見を箇条書きで以下に記載する。

問1.「大学院の授業ではシラバスに記載された到達目標として示された知識や能力を獲得できた。」

- ・自分の学びたいことを中心にしっかり学ぶことが出来た。
- ・先生がお忙しく、なかなかゆっくりご相談しにくい雰囲気がある
- ・論文指導のみで授業は受けていない。

問2.「授業の水準や範囲は大学院の授業として適切であった。」

- ・大学4年間学んだことは基礎に過ぎず、ここからようやく学んでいくのだという感覚があり手応えがある。
- ・公認心理師等の試験対策にもなってよかった
- ・論文指導のみで授業は受けていない。

問3.「授業の内容は専門知識等を習得する上で、十分な意義が感じられた。」

- ・先生方が私の研究関心に沿いながら授業内で説明を加えてくれたので。
- ・幅広い知識を習得することができた
- ・開催が少ない授業や極端に時間の短いがあった。それ以外は勉強になった。
- ・社会調査の授業が非常に役立った
- ・論文指導のみで授業は受けていない。

問4.「研究指導や論文指導のあり方について適切であった。」

- ・いつも丁寧に指導してくださっている。担当の指導教員以外にも、副指導教員、また学部、修士課程で指導教員だった先生も、引き続きご指導にあたってくれている。
その上で、どの先生も私が「わからない」「知らない」ことを馬鹿にしたりせずに、丁寧に説明してくれたり、参考文献等を紹介してくれる。
- ・コロナ禍で大学4年間の間あまり発表資料を作る機会がなかったため、院生研究発表会で発表をする機会があることでたくさんの学びがあった。まだ論文については定まっていないが引き続き教授に指導していただきつつ進めていきたい。
- ・わからないことと、再度確認すべきことを丁寧に考える時間と共に、わかりやすく解説もしていただけたことで知識が増えたと思う。
- ・時間外であっても対応していただき、研究に真摯に取り組むことができた
- ・先生がお忙しく、なかなかゆっくりご相談しにくい雰囲気がある

問5.「学外研究・学外実習について希望通り実施することができた。」

- ・希望を考慮していただき、沢山の経験を積むことができた。
- ・学外研究等をおこなっていないため

問 6.「システム全般（UNIPA での履修登録、研究助成）の手続き方法について分かりやすかった。」

- ・ユニパのシステムが大きく変わったが、ガイダンスがほとんどない修士2年以上にはその点アナウンスが杜撰だった。

- ・学部生の時と変わらないためよくわからない。
- ・使いこなせない部分もあった。
- ・履修登録の際に、取りたい授業の登録がされていなかったりと、何かとトラブルが多く、その度に事務に行かなければならなかったのは不便でした。
- ・前のほうがわかりやすく、新しくなって少しわかりにくくなりました

問7.「ガイダンスの日程や実施方法について適切であった。」

- ・日程の通達がきたのがかなり急だった。もう少し余裕を持って知りたい。
- ・いつも通りであったが、普段と同じように少し無理を感じる日程だった。

問8.「図書館他の学校の設備について満足している。」

- ・あまり使わないため
- ・購買や図書館がもう少し近いと嬉しい
- ・専門書や論文を増やして欲しい。授業で必要な文献を探して、学内の図書館で手に入ることがほとんどない状況である。
- ・図書館の空調が春の暑い日に暖房しか付けてもらえないのをどうにかしてほしいです。
- ・新しい本が少ないように思った。もっと希望図書を含めて蔵書を増やしていただきたい。
- ・心理学専攻は多摩キャンパス所属ですが、心理系の本が千代田のキャンパスに多いのは少し不便を感じました。
- ・土曜日でも平日通りに利用したい

問9.「大学院生室・大学院生自習室の利用方法（利用時間も含む）について満足している。」

- ・非常に助かっている。活用させてもらっている。
- ・出来れば日曜日でも空けて欲しい。空けているのかもしれないが、いつ空いているのかどこを見てもわからない。
- ・場所が遠い。
- ・院生室に泊まれるようにしてほしいです。夜遅くに帰宅して朝早く登校するのは非効率的だと感じたのと、帰宅時には身の危険を感じたこともあるので、できれば実験などで夜遅くまで学校に残らなければならない日は院生室への宿泊も可としてほしいと思いました。
- ・千代田の方に入室記録を書かずに利用している男性の方がおり、その方の所属がわからず怖い。男性だから、というわけではなく、職員の方なのか、学生なのかわからず緊張する。
- ・統計ソフトが最新バージョンでないためできない作業があります。最新バージョンですとありがたいです。
- ・最大 22 時まで使わせていただけることがありがたいです。

問 10.「大学院生室・大学院生自習室の設備（PC・プリンタなどの設置機器、辞書・参考文献などの資料、室内レイアウト）について満足している。」

- ・文系に必要な事典や全集などが、ちらほらと多摩キャンパスにあり、千代田キャンパスに移してほしいと思っている。
- ・プリンタの調子が悪い。
- ・プリンタの不具合が多いため。
- ・男性がいても安心して仮眠できるスペースが欲しいです。
- ・コピー機の調子が悪いものや、使えない物が多い（多摩）
- ・数は充実していますが、最近コピー機やWi-Fi が不調で利用できない時が多々あります。院生室は快適です。
- ・プリンタの故障が多かった。
また、インク代を院生が負担する環境であり、節約が必要であった。

- ・PC 関連に詳しい先生方のお力もお借りしたが、プリンタが古かったりでつながらないことが多く、印刷ができないことが多い。
- ・プリンターが新しいのが欲しい
- ・院生室にコピー機はありますが、用紙代やインク代が院生持ちな為、印刷を減らす努力、節約しなければという気持ちになるのが辛いです。図書館等の自習室に行く手段もありますが、7 号館から遠く、往復の時間も惜しいです。院生はアルバイトをしている人も少なく、院生が用紙代、インク代を負担しなければいけないことが、かなり苦しいです。研究助成金から捻出していることになっていますが、研究助成金は他の用途で無くなってしまいます。院生室のインク代だけでも補助金等、支援いただけますと幸いです。よろしくお願いします。
- ・中間スペースも飲み物は可にしてほしい。

問 11. 「事務職員の対応は適切であった。」

- ・職員によって対応に差がありすぎる。特に学生支援の男性職員陣。
- ・いつも丁寧に対応していただいております。

問 12. 「大学院の学費・奨学金制度について」

- ・親の年収があっても、学費に回してもらえないわけではないので、親の年収が考慮されない制度があると嬉しいです。
- ・博士課程の学生が奨学金を得られる仕組みが不足している。学部から修士課程、博士課程とストレートで進学している学生は、社会人入学の院生と違い金銭的に学費や生活費の確保が難しい。にも関わらず、大妻女子大学独自の奨学金は、家庭の世帯主の収入を提出するため、学生本人が働いていたとしてもその収入で学内独自奨学金に申請することができない。また、学部生と同じ枠の中で審査があるため、数千人の応募の中から一般的な家庭に世帯主収入で申請が通ることはまずない。

院生と仕事を両立して生活費と学費を捻出している院生がいるという状況を知っていただきたい。

修士課程からさらに進学し、博士課程に在学する学生は、在学中に年齢が 25～28 歳になる。学生本人の年齢的にも、家庭の世帯主収入で生活費と学費を出すことはできない。自分の収入で生活費・学費・研究にかかる費用を捻出する必要があるのである。ニーズは少ないかもしれないが、修士課程から進学しより専門的に研究を進め、大妻女子大学の中で研究に邁進している学生を支援する制度を、厳しい審査があっても良いので是非つくっていただきたい。

私は卒業まで残り少ないが、将来的に、大妻で学んだ学生が、進学し研究に携わるという選択肢を持つことができるよう、是非検討願いたい。

- ・給付型を増やして欲しい。
- ・大学院の学費は自分で払っているため、奨学金を利用したいが、家族の世帯収入が基準より少し上回っているという理由で利用できない。

IV-3 ハラスメントについて

ハラスメントに関する平成 29 年度からの調査結果を図 1 に示した。令和 5 年度は「経験がある」が 1 名、「答えたくない」が 3 名であった。自由記述欄には 3 名が次のような意見を述べている。なお、アンケートを取る際に回答結果は慎重に扱う旨、例年通り明記している。

- ・学外研修中に当方が不利益を被った際、教員の体裁を優先され、無かったことにされた。(尚、指導教諭ではない)
- ・指導教員の対応について悩み、周囲の先生方や学生相談室には昨年度から何度も相談してい

ました。対応していただいた先生方には、本当に感謝しております。大学院生は、非常に弱い立場です。論文を執筆するには指導教員との関係性は重要であり、もし指導教員の対応で違和感を覚えたことや困ることがあったとしても、関係性を崩したくないため、直接伝えることは難しいです。また、他の先生方に現状の悩みを訴えて、他の先生方を通じて指導教員に伝えてもらうにしても、学生である私が指導を不服に思っていることは伝わってしまい、その後の指導に影響が出る可能性が高いです。この経験から、このような問題は個別に対応するのではなく、大学組織全体で対応する必要性を感じました。

- ・過去にそう感じることもあり、ご相談して解決しました。

これまでもアンケート結果から、ハラスメントあるいはそれに近い状況がいまだに存在していることが推測されたが、今回のアンケートにより、アカデミックハラスメントを疑う案件が発生していることがわかった。指導教員と学生が1対1になる大学院は、ハラスメントが起りやすい環境であるとはいえ、ハラスメントは本来一件もあってはならないことである。ハラスメントは一過性の行為ではなく繰り返して行われることが多く、ハラスメントの認識がないケースもある。そのことから、本学では学生が副指導教員を含めた複数の教員から指導を受けられる体制を整え、学生の SOS 信号をできる限り早いうちに見つけ出すしくみを確立しているが、このような案件に対しては柔軟な指導教員の変更も可能にしている。

今後も次に記すハラスメント防止対策を徹底する。

- ① FD アンケートの回答について、修了生も申し出ができる機会を確保する措置を講じる。
事案にはFD委員、ハラスメント委員、専攻教員が適宜対応する。
- ② ハラスメントに関する回答のFD報告書への記載は、一部表現について個人を特定しづらい形に修正する。
- ③ 代議員会、専攻会議等でFD報告書を説明する際、ハラスメントに関するアンケート結果を必ず報告し、注意喚起を行う。

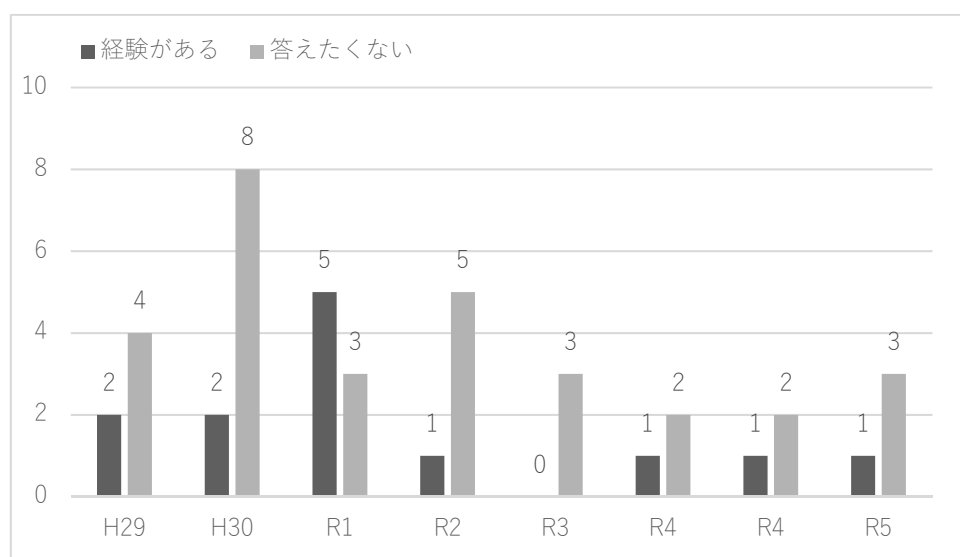


図1 ハラスメントについて

IV-4 社会人特別選抜の入学者への配慮について

社会人特別選抜の入学者を対象にした「授業の開講時間など適切な配慮がなされ、履修することができた」かの問いでは17名から回答を得た。82%が「5 非常にそう思う」か「4 そう思う」のいずれかであった。

社会人入学者の自由記述は1件あった。

- ・就業中の社会人の受け入れは望ましいことであり、評価している。半面、どうしても夜間の時間帯に履修することになるのは、zoomを使用した夜間大学の様な気がしないでもない。zoomと対面とは同じとは言えないと感じる。社会人枠は近年、リタイアした人や主婦もいると思うし、教員にも負担がかかっているのではないかな。

IV-5 その他意見・希望について

この質問に対する自由記述欄には以下のような記述があった。

- ・社会人選抜ではないのですが、授業時間の変更（2限→5限）があった際、事前の案内がないまま、社会人の方など他の方に合わせて変更になったことが少し残念でした。
- ・事務関係のデータ不備が多かったように感じます。改善するようお願いしています。

V. 大学院修了時アンケート（結果の概要）

V-1 大学院修了時アンケートの目的

このアンケートは、令和6年3月修了予定の修士課程と博士後期課程の院生を対象に在学期間中の学修環境や体験・修得した能力について把握し、また自由記述による意見を集約することで、教育・研究環境改善につなげることを目的として、令和3年度より新たに実施した。

V-2 調査対象・方法・期間・回収状況

- (1) 調査対象：大学院修士課程及び博士後期課程修了予定者（満期退学含む）34名
- (2) 調査方法：Google フォームによる WEB アンケート
- (3) 調査期間：令和6年2月24日～3月16日
- (4) 回収状況：回答数28件、回答率82.4%

	博士後期課程 人間生活科学 専攻	博士後期課程 言語文化学 専攻	修士課程 人間生活科学 専攻	修士課程 言語文化学 専攻	修士課程 現代社会研究 専攻	修士課程 臨床心理学 専攻
回答数	3	0	8	5	0	12

結果の概要は以下の通りである。

V-3 学修環境等についての評価

評価は表9の通りである。問1から問6までの各項目は4段階評価で「そう思う」4点、「ある程度そう思う」3点、「あまりそう思わない」2点、「そう思わない」1点として平均点を算出した。

表9 研究・授業、進路、学生生活についての評価

	回答数	問1	問2	問3	問4	問5	問6
		本学大学院在学中は研究・学業に意欲的に取り組みましたか	開講科目の数や種類は十分でしたか。	授業内容は、全体として満足していますか。	研究指導や論文指導について指導教員から十分な指導を受けることができましたか。	修了後の進路は希望に沿ったものになりましたか	大学院での学生生活に満足していますか。
全平均	28	3.7	3.5	3.5	3.4	3.3	3.6
最高点		4	4	4	4	4	4
最低点		3	2	3	1	2	2

※表中数値は平均値、最高点及び最低点

問 1 から問 6 までの平均値は 3.3～3.7 の範囲内であった。それぞれの質問項目間における顕著な差異は、伺われない。

V-4 大学院在学中に体験・修得した能力

知識や能力の向上に大きく役立ったことを表 1 0 に、在学中に修得した能力について表 1 1 にまとめた。

表 1 0 知識や能力の向上に大きく役立ったことについて（複数回答）

	R3	R4	R5
1 大学院での授業全般	70	50	78.6
2 指導教員による指導	90	75	64.3
3 研究活動	90	50	75
4 論文執筆	70	25	78.6
5 論文発表、最終試験	50	25	57.1
6 資格取得	0	12.5	25
7 院生時代に築いた人脈	50	50	53.6
8 その他	0	12.5	7.1
9 特に役立っているものはない	0	12.5	0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

表 1 0 からは、次のことを読み取ることができる。知識や能力の向上に大きく役立ったこととしては、昨年度と比較し、概して向上している。とりわけ「論文執筆」は、昨年の 25%から 78.6%へと大きく向上している。もっとも一昨年度が 70%であるから、旧に復したというべきかもしれない。他方指導教員による指導が、75%から 64.3%に低落していることが気にかかる。次の表 1 1 をみると、多くの項目で、昨年から大きく数値が低下しているものが目立つ。「肯定的な意味で批判的に考える力」が 37.5%から 17.9%へ、「自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力」が、75%から 32.1%へ、「人間関係を築いたり調整する力」に至っては 87.5%から 32.1%まで低落している。充実した研究生生活を送ることはできたが、討論や人間関係の中から学ぶ力を身につけることはできなかったということだろうか。解釈に苦しむ数字ではある。

「英語の運用力」「情報技術の運用力」に関しては、共に 0%であった昨年一昨年より向上しているが、それぞれ 3.6%、17.9%と低い数値にとどまっている。もちろん領域による必要性の際があるとはいえ、研究を行う上で必須のスキルである両項目におけるこの数字にはいささかお寒い者を感じる。

表 1 1 在学中に修得した能力について（複数回答）回答率（%）で表示

	R3	R4	R5
1 教養	30	12.5	35.7
2 ものごとを分析する力	90	50	64.3
3 問題を論理的に考える力	80	50	57.1
4 特定の専門分野に関する理解力	70	75	75
5 肯定的な意味で批判的に考える力	30	37.5	17.9
6 自分と異なる意見や考え方を柔軟に理解する力	60	75	32.1
7 リーダーシップ	0	12.5	7.1
8 人間関係を築いたり調整する力	30	87.5	32.1
9 地域社会が抱える問題への関心や理解力	20	37.5	14.3
10 明快かつ簡潔に話す力	20	25	28.6
11 表現すべき内容の文章を書く力	50	62.5	46.4
12 英語以外の外国語の運用力	0	0	3.6
13 プレゼンテーションを準備し発表する力	60	50	53.6

14	学術的な文献の読解力	40	62.5	39.3
15	情報技術（ICT）の運用力	10	0	17.9
16	国際的な諸問題に対する関心や理解力	0	0	3.6
17	英語の運用力	0	0	3.6
18	ものごとの本質をみて判断しようとする力	50	37.5	28.6
19	自分を律して行動する力	40	37.5	25
20	得た知識やスキルを活かして問題を解決する力	60	50	21.4
21	これらの項目については特に伸びていない	0	0	0

※表中数値は%

※複数回答のため、合計は100%を超えている。

V-5 教育全般についての自由記述

教育全般について、以下のような自由記述があった。

- ・Wi-Fi環境を整えていただきたいです。空気清浄機も感染症予防にいただきたいです。
- ・学部卒業後、修士・博士後期課程と連続して所属することとなりました。残念ながら、M2～新型コロナの流行が始まり、実験を行いたい時に行えなかった等、如何ともしがたい状況下にはありましたが、オンラインでの授業や発表会等、研究はまずまず行えたのではないかと思います。個人的には、栄養学等の実学的内容は、自らの実務経験を下に、大学院に戻って研究につなげやすいのではないかと考えております。コロナの流行によって、大学院に進学しようと考えた人も少なからずいると思います。そのため、今後も社会人の入学希望者は増えるのではないかと思いますので、ぜひそういった方々への柔軟な対応を行っていただければと思います。
- ・大学院での卒業必要単位はもう少し少ない方が、より早めに研究に注力できると思いました。
- ・大学院生室の水道が後期途中から使用できなくなり、また、全体発表会終了後すぐに使用できなくなってしまう事に非常に不自由を感じました。大学へ行っても集中して作業をする場所がなくて困っているので、せめて卒業式までは使用できるように考慮していただきたいかったです。
- ・授業に関してとても勉強になりました。しかし、大学院1年時の後期は学内外の実習が始まる中で授業数が非常に多く、学部と異なり学生主体の授業であるため、授業準備に要する時間の捻出が困難でした。結果として睡眠時間を削ることになり、同期の多くが体調を崩していました。ご存じかもしれませんが、睡眠時間を削り体調に支障が生じるほど忙しい現状を認識いただけますと幸いです。ありがとうございました。
- ・大学院生と指導教員の関係は権力勾配が非常に明確で、閉鎖性が高い環境にあります。指導教員が認めなければ、助成金を申請することも、論文を投稿することも、学位審査を受けることも含め、あらゆる研究活動ができないので、大学院生は非常に弱い立場です。このような条件はハラスメントが起りやすい環境であり、指導にあたる先生方ひとりひとりの研究倫理観や教育倫理観に依存する部分が大きいと感じました。私は、今回の件で周囲の先生や学生相談室、そしてハラスメント協会と頼れる資源にはすべて頼りました。皆さまが善意を尽くしてくださったおかげで、修了に至れたと思います。どの研究室に所属したとしても、院生ひとりひとりが安心して研究できる環境が得られるよう、学院全体の課題として取り組んでいただきたいと、強く願っております。

VI. 院 生 ・ 教 員 懇 談 会 の 実 施

開催の時期・方法については、各専攻・専修の協議によるものとした。今年度の実施状況は以下の通りであった。

専攻	実施内容
人間生活科学専攻D	令和6年2月16日(金)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施し、その後に修士、博士課程の学生と教員の懇親会を実施した(健康・栄養)。 本年度は1月中旬に大学で院生各自にお菓子を配布した(保育・教育学)
人間生活科学専攻M (健康・栄養科学専修) (生活環境学専修)	令和6年2月16日(金)に対面方式で専修内修士論文発表会を実施し、その後に修士、博士課程の学生と教員の懇親会を実施しました。 所属学生3名を一堂に会しての懇談会は、開催しなかった。代わりに、前後期各1回開催の研究指導会等において学生より出された意見・感想を、適宜指導教員より聴取した。
(保育・教育学専修)	6月と2月の専修内発表会の時に院生と教員の交流を促すとともに、発表会にはオンライン参加の社会人院生も少なくないため、本年度は1月中旬に大学で院生各自にお菓子を配布した。
言語文化学専攻 (日本文学専修)	言語文化学専攻日本文学専修では、令和5年7月20日(木)に開催した「日本文学専修院生研究発表会」終了後、日本文学専修の院生及び教員の懇談をおこなった。また、担当教員が学生からの意見や要望を普段から受け付け、適宜対処した。
(国際文化専修)	2023年5月29日(月)昼休みに大学院生および主指導教員が昼食会をおこない、院生・教員懇談会とした。
現代社会研究専攻 (臨床社会学専修)	本年度は在籍した院生が一人は社会人、一人は遠隔の茨城におり、しかも修士論文の執筆で繁忙を極めていたので、懇談会を行うことができなかった。しかし日々の授業の中で、様々な希望をくみ取る努力は続けられていた
臨床心理学専攻	2023年前期と後期の2回、大学院授業、実習、院生室の環境や学生生活等について、意見や要望、質問等を出してもらうように依頼した。その後、書面で提出された意見等(心理相談センターの利用方法について、院生室の空調の暖房の効きの悪さ、来年度入学の新M1の人数について)に関し、院生と大学院担当教員とで質疑応答と意見交換の時間を設けた。 その他、2024年2月24日(土)には非常勤講師(スーパーヴァイザー)と院生の顔合わせと交流を目的とした懇談会/情報交換会を行うなど、昨年と同様に定期的なFD活動を行い、その結果を大学院教育と院生生活の整備に還元している。

VII. 学会発表の奨励に関する活動

学会発表に備えて、院生の各種学会への参加を奨励してきた結果、今年度の参加状況は次表の通りであった。活動類型のうち、「学会参加」のカテゴリーには「各種シンポジウム」「全国フォーラム」等への参加も含むが、学会での「発表」は含まないものとし、別途、IXに記載する。

専攻	活動類型	件数	内容
人間生活科学専攻 博士後期課程	学会参加	6 件	【健康・栄養科学専修】 日本栄養・食料学会大会、第 32 回日本バイオイメージング学会学術集会 【保育・教育学専修】 日本保育学会 第 76 回大会、第 62 回 大学美術教育学会香川大会、SSTA 埼玉支部 研究待機、理科授業研究会
言語文化学専攻 博士後期課程	学会参加	2 件	【日本文学専修】 日本近代文学会春季大会、昭和文学会 春季大会
人間生活科学専攻 修士課程	学会参加	20 件	【健康・栄養科学専修】 日本抗加齢医学会総会、腸内細菌学会、日本食糧・栄養学会関東支部シンポジウム、東京都栄養士大会、日本栄養改善学会学術総会、第 82 回日本公衆衛生学会総会、第 111 回日本栄養・食糧学会関東支部シンポジウム、第 27 回日本病態栄養学会年次学術集会、第 37 回日本糖尿病・肥満動物学会 【保育・教育学専修】 第 13 回学童保育学会研究大会、第 61 回教育科学研究会全国大会、第 58 回全国学童保育研究集会、社会調査協会シンポジウム 【生活環境学】 海洋教育実践研究発表交流会、国際海洋環境デザイン会議 Side: Education、比較環境思想研究会、日本家政学会被服心理学部会・令和 5 年度公開春季セミナー、日本衣服学会・第 47 回(令和 5 年度)年次大会、2023 年度被服学専攻 修士論文発表会、日本デザイン学会ファッション・デザイン部会
言語文化学専攻 修士課程	学会参加	4 件	【日本文学専修】 日本語学会 2023 年度春季大会 【国際文化専修】 中国文化学会大会、共同研究プロジェクト「近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係」(研究代表者:松村茂樹)基調講演、中国文化学会 「新科目『言語文化』とこれからの漢文教育—対話的で主体的な学びの進展のために—」
臨床心理学専攻 修士課程	学会参加	7 件	心理臨床学会、学校心理学会、発達心理学会、動物介在教育・療学会第 16 回学術大会、日本心理臨床学会第 42 回大会、日本心理学会第 87 回大会、日本生理心理学会若手会

Ⅷ. 学内発表会の奨励・支援に関する活動

学内での論文発表会については、「令和 5 年度大学院要覧」11 頁に、「修士論文審査等に関する日程」のうち、第 8 番目の項目に「論文発表会の開催」として記載されている。その修士論文発表会を、令和 6 年 2 月 24 日に実施した。総勢 30 名の院生が発表した。当日のプログラムを以下に掲載しておく。

令和5年度 修士論文発表プログラム
(オンラインによる開催)

日時 令和6年2月24日(土)9時00分開始(ミーティングへの入室は8時40分から可)

開会の挨拶
午前の部司会 田中 直子 人間文化研究科長

ルーム1の司会(午後の部) 伊東 武彦 言語文化学専攻主任

ルーム2の司会 青江 誠一郎 教務委員長(人間生活科学専攻主任)

ルーム	開始予定時刻	発表順	発表者
①	9:00		青江 誠一郎 教務委員長プログラム説明
①	9:05		田中直子 研究科長あいさつ
①	9:10	1	臨床心理学専攻
①	9:27	2	臨床心理学専攻
①	9:44	3	臨床心理学専攻
①	10:01	4	臨床心理学専攻
①	10:18	5	臨床心理学専攻
①	10:35	6	臨床心理学専攻
①	10:52	7	臨床心理学専攻
①	11:09～11:14		休憩・接続確認
①	11:14	8	臨床心理学専攻
①	11:31	9	臨床心理学専攻
①	11:48	10	臨床心理学専攻
①	12:05	11	臨床心理学専攻
①	12:22	12	現代社会研究専攻 臨床社会学専修
①	12:39	13	現代社会研究専攻 臨床社会学専修
①	13:56～13:43		昼食休憩・接続確認
昼食休憩後2ルームに分かれて実施(人間生活科学専攻の発表順14～20の方はルーム2で接続確認を行ってから休憩に入る)			
①	13:43	14	言語文化学専攻 日本文学専修
①	14:00	15	言語文化学専攻 日本文学専修
①	14:17	16	言語文化学専攻 日本文学専修
①	14:34	17	言語文化学専攻 日本文学専修
①	14:51	18	言語文化学専攻 国際文化専修
①	15:08	19	言語文化学専攻 国際文化専修
①	15:25	20	言語文化学専攻 国際文化専修
②	13:56～13:43		休憩・接続確認
②	13:43	15	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	14:00	16	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	14:17	17	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	14:34	18	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	14:51	19	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	15:08	20	人間生活科学専攻 健康・栄養科学専修
②	15:25～15:35		休憩・接続確認
②	15:35	21	人間生活科学専攻 生活環境学専修
②	15:52	22	人間生活科学専攻 生活環境学専修
②	16:09	23	人間生活科学専攻 保育・教育学専修
②	16:26	24	人間生活科学専攻 保育・教育学専修

ルーム 1

ルーム 2

・持ち時間1人17分(発表12分、質疑応答・交代5分)です。発表開始から12分経過時、17分経過時が分かるよう、Zoom上でお知らせします。

・発表開始時間は進行状況により前後する場合があります。また、通信の不具合やその他の都合により発表が開始されない場合は、発表順を変更する場合があります。

【オンライン実施上の注意】

・Zoomを利用して開催します。**なお、今年度は昼食休憩後にZoomの部屋を2つに分けて行います。**

※ルーム1、ルーム2共にどの専攻でも入室可

ミーティングのURLは、別途送信するメール本文でご確認ください。

・Zoomの個人表示名は自身の氏名にしてください。発表者は氏名の前に「発表」の文字を入れてください。

(例: 発表 大妻花子)

・発表時、Zoomを接続している場所の周囲の環境音や、紙をめくる音などが雑音としてマイクに入ることがありますので、極力静かな環境で参加してください。

・入室時はマイクをミュートにし、発表順になったらミュートを解除してください。発表の2分前にはマイク・カメラを用意し、パワーポイント画面共有の準備をしておいてください。

・ご自身の発表時以外はマイクをミュートにしてください。カメラはオン・オフどちらでもかまいません。

なお、発表者への質疑時に発言する際は、マイク及びカメラを必ずオンにしてください。

・自分の発表以外は録音や録画をしないでください。

67

IX. 院生論文集発行の奨励・支援に関する活動

新研究科の設置の趣旨に適合した院生論文集として、「人間生活文化研究:International Journal of Human Culture Studies」に掲載することとした。令和5年度の修士論文概要は、オンラインジャーナルの”No.34 2024”に掲載される。各専攻での研究教育活動の状況は以下の通りであった。研究教育活動の内容を「論文発表」「口頭発表」「ポスター発表」に分けて以下に示す。

専攻	発表形式	題目
人間生活科学専攻 博士後期課程	論文発表	Oleic acid activates mitochondrial energy metabolism and reduces oxidative stress resistance in the pancreatic β -cell line INS-1.
	ポスター発表	オレイン酸が膵臓 β 細胞の機能に与える影響:網羅的解析による検討
	論文発表	The Association Between Eating Quickly and Excessive Gestational Weight Gain.
	ポスター発表	日本人における妊娠中体重増加量と産後の体重の関連
	口頭発表	心理療法におけるポジティブ感情の相互的感情調節プロセスモデル構築と実証的検討
	論文発表	心理療法におけるポジティブ感情の相互的感情調節についての質的研究
	口頭発表	padlet を活用したプロジェクト活動における記録の検討 - 学科特別行事を通して -
	口頭発表	カタマリと向き合う(展示発表)
	口頭発表	保育者養成校における科目「造形表現」の検討～保育学生の苦手意識に着目して～
	口頭発表	白い塊 - White Mass - (作品発表)
	ポスター発表	アイディアを形にする
	論文発表	端材×造形(産学連携レポート)
	論文発表	素材をミクロにマクロにみる(実践報告)
	論文発表	ストーリーメイキングの原点—乳幼児におけるパネルシアターの体験の観察をもとに—
	口頭発表	
	論文発表	THE RELATIONSHIP BETWEEN PANEL THEATER AND SUSTAINABILITY OF CONCENTRATION - FOCUSING ON CHILDREN
	論文発表	マスク着用保育において視覚的表現を意図的に取り入れる意味の検討
	口頭発表	幼児期における科学概念の萌芽に関する研究 - 保育者の実践に関する言葉から -

	口頭発表	保育者の「実践知」における暗黙的な側面を探る
言語文化学専攻 博士後期課程	口頭発表	花袋と師松浦辰男－紀行文における「詠歌十訓」－
	口頭発表	田山花袋の「平面描写」－「悲劇？」を手掛かりに－
人間生活科学専攻 修士課程	ポスター発表	単身生活による青年の食生活変化に関する検討
	ポスター発表	AQP3 スプライシングバリエーションの培地交換後の発現量の変化
	口頭発表	裁ち目なしきものの課題と対処
	ポスター発表	里海を活用した小学生対象の海洋教育事例 ～能登半島の小学校における海育の取り組み～
言語文化学専攻 修士課程	口頭発表	村岡花子の「家庭」
	口頭発表	「少年」から「悪女」へ－谷崎潤一郎が描く娼婦的ヒロイン像－
	口頭発表	「日韓の若者とヘイトスピーチ ～日本の学生として～」
	口頭発表	朝鮮半島の非核化と安全保障のジレンマ
	口頭発表	ムン政権とユン政権の徴用工問題への対応
	口頭発表	平和の少女像と水曜デモ
	口頭発表	邑楽町における隠れキリタンからみる地域共生の考察
	論文発表	近現代アジア太平洋地域における文化の諸相に見る相関関係－キース・ヴィンセント氏による基調講演会を受けてのシンポジウム記録－(共著)
	口頭発表	
	口頭発表	呉昌碩早期における文人的思考の考察
臨床心理学専攻 修士課程	ポスター発表	消防職員のワーク・エンゲイジメントを高める資源構造に関する研究 －レジリエンスと人間関係に注目して－
	ポスター発表	身体感覚に注目したマインドフルネストレーニングの効果
	ポスター発表	個人特性がマインドフルネスワークの適性に及ぼす影響

X. 他大学との各種連携の活性化に関する活動

現在、現代社会研究専攻では、相互の交流と発展を目指して、社会学分野ならびにその関連分野の授業科目に関して、特別聴講学生の単位互換制度を設けている。詳しくは、「令和5年度大学院要覧」28頁を参照されたい。

XI. 就職支援に関する活動

今後、キャリア教育の充実の観点から就職支援を強化していくための具体的な方策を検討していく。

専攻	主な進学先・就職先	
人間生活科学	就職	・アズワン株式会社 ・東京聖栄大学 ・公益財団法人東京都歴史文化財団
言語文化学	就職	・C-United株式会社 ・千葉市役所 ・千葉県教育委員会 ・陸奥テックコンサルタント株式会社 ・城南信用金庫
	進学	・大妻女子大学大学院 人間文化研究科 博士後期課程 国際文化専修
臨床心理学	就職	・独立行政法人国立病院機構 ・株式会社富士キメラ総研 ・医療法人財団明理会 鶴川サナトリウム病院 ・川崎市教育委員会 ・沖縄県中央児童相談所 ・葛飾区役所 ・足立区役所 ・相模原市立青少年相談センター ・横浜市役所
	進学	・桜美林大学大学院 国際学術研究 学位プログラム 心理学研究領域 博士後期課程

XII. 社会人院生・社会人教育の実質化のための活動

社会人特別選抜の入学者に授業の開講時間など適切な配慮がなされたかについては、アンケートをとったところ、全体の評価は良く、社会人学生から一定の評価を受けているといえる。

また、「大学院設置基準第14条に定める教育方法の特例」により勤務形態に配慮した教育研究体制を希望する学生の入学にあたり、入学先となる人間生活科学専攻教員への周知体制を強化した。

次年度も引き続き、千代田・多摩キャンパスの連携・充実を具体的にどのように推進していくか検討する。

XIII. 研究科設置の主旨に沿った教育方針具体化のための活動

新研究科の設置の主旨のひとつである「学部横断的（専攻・専修横断的）な教育・研究体制のあり方」、ならびに、「学位取得に至るまでの組織的指導体制の具体化・実質化」を推進して行くために、平成23年度入学生より、「中間発表会（旧研究計画発表会）」を研究科全体で実施することとし、「修士論文審査等に関する日程」のプログラムの中に位置付けることを決めた。

XIV. その他の活動

「その他の活動」として、院生によるティーチング・アシスタントの実施状況一覧を次に掲載しておく。

ティーチング・アシスタント等について

所属・学年等	担当授業科目					
	開講学科等	授業科目名	授業担当 教員名	開講 時期	開講曜日 ・時限	開講 校地
人間生活科学専攻 (博士課程) 3 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	人体構造機能論実験	高波 嘉一 明渡 陽子	前期	金曜 3、4 限	千代田校
人間生活科学専攻 (修士課程) 2 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	実践統計学	清原 康介	後期	水曜 3 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	食品学実験	渡辺 雄二	後期	金曜 3、4 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 環境情報学専攻	情報処理実習A	鈴木 優志	前期	木曜 3、4 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 情報デザイン専攻	情報処理実習A	矢口 哲郎	前期	金曜 1、2 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 情報デザイン専攻	情報処理実習A	矢口 哲郎	前期	金曜 3、4 限	千代田校
	社会情報学部 社会情報学科 社会生活情報学専攻	情報処理実習B	矢口 哲郎	後期	水曜 3、4 限	千代田校
人間生活科学専攻 (修士課程) 1 年	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	生活環境実験	田中 直子	前期	木曜 3、4 限	千代田校
	家政学部 食物学科 管理栄養士専攻	基礎調理学実習Ⅱ	玉木 有子	後期	月曜 3、4 限	千代田校

現代社会研究専攻 (修士課程) 2 年	社会情報学部 社会情報学科 社会生活情報学専攻	量の調査演習	池田 緑	前期	金曜 3 限	千代田校
臨床心理学専攻 (修士課程) 1 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅰ	八城 薫	前期	水曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	本田 周二	後期	木曜 1 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	キャリア心理学セミナー	八城 薫 三好 真 高丸 理香	前期	水曜 4 限	多摩校
臨床心理学専攻 (修士課程) 2 年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅰ	高橋 幸子	前期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	基礎統計学Ⅱ	伊藤 尚枝	後期	火曜 3 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会・臨床心理学基礎 セミナー	八城 薫 三好 真 吉澤 良美	前期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	堀 洋元	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法基礎	伊藤 尚枝	後期	火曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	堀 洋元	後期	火曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学統計法	八城 薫	後期	火曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	社会心理学実験研究法 (心理学実験)	堀 洋元 伊藤 尚枝	前期	火曜 3、4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	キャリア心理学セミナー	八城 薫 三好 真 高丸 理香	前期	水曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法	高橋 幸子 三好 真	前期	火曜 1、2 限	多摩校

臨床心理学専攻 (修士課程) 2年	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	心理学研究法	田中 優 大久保 暢俊	前期	木曜 1、2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻	コンピュータ基礎A	西川 徹	前期	月曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	コンピュータ基礎A	小幡 正子	前期	水曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	コンピュータ基礎A	加藤 浩治	前期	木曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会学専攻	コンピュータ基礎B	西川 徹	後期	月曜 4 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	コンピュータ基礎B	小幡 正子	後期	水曜 2 限	多摩校
	人間関係学部 人間関係学科 社会・臨床心理学専攻	コンピュータ基礎B	加藤 浩治	後期	木曜 2 限	多摩校
	人間関係学部	コンピュータ応用	加藤 浩治	後期	木曜 3 限	多摩校

XV. おわりに

今回は、「大学院進学意識に関するアンケート」「大学院の研究・教育に関するアンケート」「大学院修了時アンケート」の3種類のアンケートを実施した。評価を点数化し経年変化をみる集計方法は継承し、自由記述も基本的にはほぼそのままを掲載した。

2020年度から始まったコロナ禍も、2023年5月の感染症法上の5類への移行に伴い、一応の終息をみた。その結果対面での授業も増え、授業や研究指導の面での満足度の向上がみられた一方で、大学の外に出て研究や教育の活動を行うことへの躊躇いが残っていることが、データから読み取れた。

自由記述への回答をみると、学費への不満が大きいことがわかる。進学ネックとなっているのが高額な学費であり、奨学金等は充実しているとはいえ、給付のものは少ない。奨学金や学費の減免には所得制限が設けられているが、所得は親の所得であり、大学を卒業した者が親のお金で大学院教育を受ける前提が存在することに違和感を覚える回答もあった。働いている社会人学生は奨学金支給の対象とならないが、これも改善の余地はあるだろう。本学だけではどうにもならない面があるが、この金銭面の問題が解決されれば、さらなる進学者の増加も期待できるのではないかと。

やはり自由記述の回答のなかから浮かび上がってきたのが、院生室の問題である。プリンターのインクや、印刷に使う紙が自弁という現状は改善の余地があるのではないかと。院生の数を考えれば、大学がこれらを提供したとしても大きな財政的負担になるとは思えない。安心し

て研究のできる環境を整えるために早急にこれを実現していただきたい。

また研究室の問題に関連して、千代田と多摩の格差という問題も浮かび上がっている。院生室の充実度が、千代田より劣っている、千代田にある図書が多摩にはない、という意見がのべられていた。言うほどの格差はないのかもしれない。しかし、圧倒的な規模の差を背景に、「多摩は千代田に比べて冷遇されている」という感覚は学部生にも広くみられる。全学的に一考すべき問題である。

最後にハラスメントの問題であるが、これは極めてデリケートな問題であって、こうしたアンケートでその全容が明らかになる性質のものではない。しかしデータを見る限り、ハラスメントが皆無であるとは言い切れないだろう。教員と院生の間に大きな力関係の隔たりがあり、しかも極めて緊密な人間関係のなかで行われる大学院の教育研究活動においては、教員の側にとってはまったく善意の指導であっても、院生の側にはハラスメントと受け止められないリスクは避けがたい。大学院生の日常が、授業や研究の負担が大変大きく、アルバイトや就活もせざるを得ないために非常にストレスフルなものになっていることは全国的にも指摘されている。大学院生のメンタルヘルスの維持にわれわれ教員も心を配るべきであろう。

以 上